

安田女子大学紀要 47, 143-154 2019.

保育所における気になる子どもへの 保育士が行う運動遊びを用いた支援と課題

西 川 ひろ子

Conditions and Issues of Physical Play Support for Young Children with Special
Educational Needs in Nursery School

Hiroko NISHIKAWA

要 旨

気になる子どもの発達の遅れにクラス担任保育士が気付くのは1歳から2歳が最も多いのに対して、個別支援の加配保育士の多くは、対象児が4歳から5歳児となった時に配当されている現状が明らかとなった。また、気になる子どもが集団から逸脱しやすいのは運動遊び場面であり、そこで保育士が行う支援は、個別に指示が多く、簡潔な言葉で説明、見守り、刺激を少なくし環境を工夫することが多かった。具体的な運動遊び場面で保育士の配慮は、子どもが楽しめるように見守り、言葉がけを行うことが最も多かった。保育士にとって負担感が多い運動遊びではあるが、その教育効果は高く、運動遊びを通して子ども達は気になる行動が落ち着くようになり、待つことが出来るようになったなどがあげられた。課題は、効果が高い個別指導計画を作成することが困難であることだった。個別指導計画を作成されない要因を明らかにすることが今後の課題である。

キーワード：気になる子ども、運動遊び、発達障害、感覚統合

1. 研究目的

気になる子ども¹⁾とは、発達面の遅滞や問題行動が多いなどのコミュニケーション能力が低いと保育士が感じる子どものことであり、発達障害などの診断を受ける前、もしくはグレーゾーンと呼ばれる発達障害の傾向が見られる幼児に対して、「気になる子」と保育士等は感じるようである。気になる子どもは、5つに大別することができる。①衝動タイプ：気にいらぬことがあると、突発的に物を投げたり、パニックを起こしたり、泣きわめく。②集中困難で落ち着きのないタイプ：すぐに気が散り、保育士の話や指示を聞くことができず、活動に長い時間従事することが困難である。③指示待ちタイプ：生活習慣や活動に関して、保育士が個別に促さないと取り組まない。④人の目をひこうとするタイプ：保育士や幼児の気をひこうするために問題行動を起こす。⑤固執タイプ：ある活動や行為に固執し、その行動をしつづける。さらに全タイプに共通する問題として、コミュニケーションや言葉の発達の遅滞がある。その原因は、脳機能の障害以外に、保護者の養育態度や生活体験の乏しさ、基本的な生活習慣の未定着などが指摘されて

いる。

気になる子ども達への支援や援助に悩む保育者は多い。障害児保育に関する研修会は、盛んではあるが、発達が気になる子ども達の個人差が大きく、研修をうけても実際に行える支援との乖離を訴える声も多い。さらに、気になる子どもは勝敗がある集団遊びでは遊びの場から逃亡し、ルールを守ることが出来ない等の問題行動を起こしやすい。しかし、その一方で運動遊びは自己開放ができ、気持ちを発散し、体力面の育ちを促すことにも有効であるとの報告もある。例えば、洪井ら(2013)によると、微細運動(はさみ、ぬりえ)・静的バランス運動(ポーズをとる)・動的バランス運動(トランポリン・一本橋)を、一定期間行うことにより、子どもの運動面の成長のみではなく、友達とのかかわりが増え、集中力が続くようになるなど、生活面での成長も見られたことを指摘している²⁾。だが、この実践は発達支援センターの運動療法室を使用しており、幼稚園や保育所でも同じように取り組むことが出来るのかが不明である。また、松原(2017)は、気になる子どもが運動遊びを行う際の配慮として、発達段階に合わせてスモールステップで行うことや刺激を軽減して環境を工夫する大切さを述べているが³⁾、保育所での運動遊びにおける保育士が行っている気になる子どもへの配慮の状況や課題については言及されていない。では、保育所では運動場面ではどのように気になる子どもに支援を行っているのだろうか。保育士が行っている支援の状況が明らかになることによって、保育者が抱える課題も明らかになり、効果的な気になる子どもへの支援や配慮を行うことが出来る。

実際の保育所では、運動遊びを用いて気になる子どもの発達を促す支援はどのように取り組んでいるのであろうか。気になる子どもに対する支援や配慮を行うにあたって保育士はどのような課題を感じているのであろうか。これらを明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究の方法

(1) 研究方法

本研究の方法は、保育者へ運動遊び場面での気になる子どもへの支援に関するアンケート調査である。一部の保育所を対象とするのではなく、全市の保育所に対してアンケートを実施した。このことにより、保育所保育士が実践している気になる子どもへの運動遊びを用いた支援の現状が明らかになると考えられる。

(2) 調査日時及び調査対象

調査日時：2017(平成29)年7月17日

調査対象者：H市全保育所保育所保育士 81名 回収率 100%

H市は、障害児保育に積極的に取り組んでおり、5歳児クラスにはほぼ全てに障害児の個別支援のための加配保育士を配置している。

(3) 調査項目

調査項目は、職業、勤務年数、気になる子どもにどのような支援を行っているかなど、以下に示した17項目である。

- ①職種を教えてください。
- ②勤務年数を教えてください。
- ③あなたのクラスに気になる子どもはいますか。
- ④その子どもの年齢を教えてください。

- ⑤気になる子どもはどのようなタイプですか。
- ⑥集中するのが困難で落ち着かない子どもにはどのような支援をされていますか。
- ⑦固執タイプの子どもにはどのような支援をされていますか。
- ⑧集団行動に入れないのはどのような理由だと思われますか。
- ⑨気になる子どもに運動遊びを用いた支援をされていますか。
- ⑩気になる子どもへの支援や保育でよく使われる運動遊びのジャンルを教えてください。
- ⑪運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されている方は、支援する上でどのような事に気を付けていますか。
- ⑫運動遊びを用いた支援を気になる子どもへ実践されている方に対して、それらの支援によって子ども達はどのような変化や成長がみられましたか。
- ⑬運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されていない方は、運動遊びの他にどのような支援をされていますか。
- ⑭運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されていない方は、運動遊び以外の支援を行う際にどのような事に気を付けていますか。
- ⑮今後どういった保育者の配慮や援助が、気になる子どもに効果的な支援になると考えますか。
- ⑯気になる子ども達の支援や配慮の為に個人計画や指導計画を作成されていますか。

3. 研究結果

回答者の96%が、保育所保育士であった。また、その勤務年数は30年以上勤務している回答者が31%と最も多く、20年から30年未満が15%、10年から20年未満が20%、3年から10年未満が14%、3年未満が20%であった。回答者の勤務年数に大きな偏りは無かった。

質問の「③あなたのクラスに気になる子どもはいますか。」「④その子どもの年齢を教えてください。」の回答結果は図1と図2に示した。なお、数値はいずれもパーセントである。

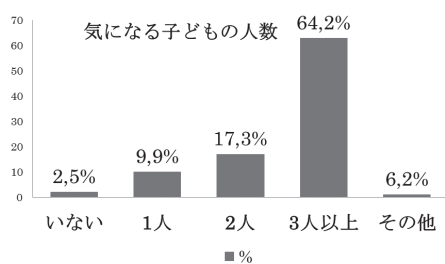


図1 気になる子どもの人数 (N=81)

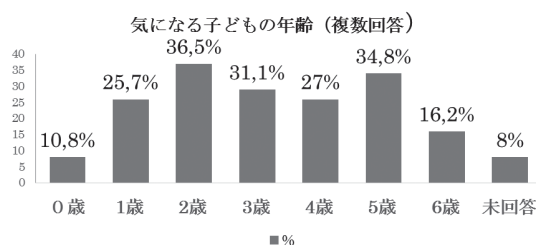


図2 気になる子どもの年齢 (複数回答, N=81)

「気になる子どもが一人以上いる」との回答が91.4%で、ほとんどのクラスや園に気になる子どもが在園していることが明らかとなった。また、多くのクラスに3人以上、気になる子どもが所属していることも明らかとなった。例え加配保育士がクラスに配置されていたとしても、気になる子どもは前述したように複数のタイプがあり、3人以上の気になる子どもがいるクラスでは、同じ支援では十分に対応することが難しく、担任保育士の困惑が伺える。更に、加配保育士

が4から5歳児から配置されることが多いことに対し、担任保育士が1歳の気になる子どもがいるとの回答した保育士が25.7%、2歳の気になる子どもがいるとの回答した保育士が36.5%もいたことから、子どもが1歳ごろから保育士は育ちが気になると感じていることが明らかとなった。このことにより、保育士はより早期の気になる子どもへの支援を求めている状況が推測される。

では、気になる子どものタイプには傾向があるのでしょうか。質問の「⑤気になる子どもはどのようなタイプですか。」という問いに対して、図3に示した通り、「集中困難で落ち着かないタイプ」が74%、「衝動タイプ」を54%の割合で保育者が回答している。この結果から、ADHD傾向が高い子どもを気になる子どもと保育者が認識していることが明らかとなった。また、「こだわりの強い固執タイプ」は、54%、「集団行動に入るのが苦手なタイプ」52%と回答率も高く、自閉症傾向の子どもも多く在園している可能性がある。いずれにせよ、保育者は集団活動場で子ども達の行動に対して気になると捉え、ADHD傾向もしくは自閉症傾向を疑いながら、対象児の発達を気にかけて始めるようである。

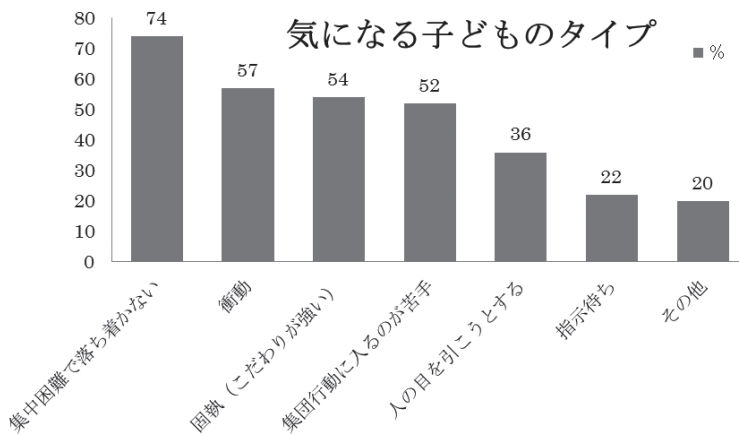


図3 気になる子どものタイプ (N=81)

次に、保育士が最も多いタイプと回答した落ち着きがない子どもに対する支援は、質問の「⑥集中するのが困難で落ち着かない子どもにはどのような支援をされていますか。」の回答結果を図4に示した。集中困難で落ち着かないタイプの子どもに対する保育士への支援は、多岐にわたっての回答が多く、幾つかの支援を組み合わせで行われていることが分かった。特に、「無理やり活動に参加させず見守る」が58%、「自己肯定感を高める」が53%、「刺激を少なくし、集中しやすい環境を工夫する」51%、「褒めるときはみんなの前、注意は個別」が46%、「カードを使った視覚援助」「席を先生の前にする」「加配保育士をつける」がいずれも38%と高かった。保育者は子どもが集中しやすいように環境を整えるだけでなく、子どもに無理させないに支援することにも配慮していた。

二番目に多かったこだわりの強い固執タイプの子どもに対して保育者が行っている支援については、図5のような結果となった。

固執タイプの子どもへの支援については、図4に示した通り、個別の指示が97%最も多かった

が、「簡潔名良に指示する」が87%、「視覚的援助」が73%、「見通し」が68%、「肯定的な言葉かけ」が68%、「具体的に指示する」が65%と6割を超す支援が複数あり、「注意」「指示」といった直接的な指導ではない多様な支援を合わせて行っていることが明らかになった。保育士が最も多いと回答した集中が難しい落ち着きがないタイプとこだわりが強いタイプの子ども達への支援は様々な取組があったが、本論文のテーマである運動遊びを落ち着きがない子どもや子どもに行っていると回答した保育士はいなかった。

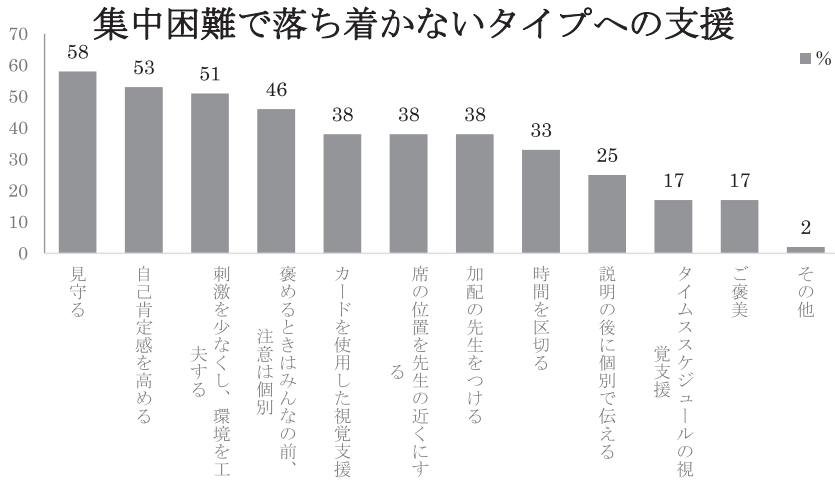


図4 集中するのが困難で落ち着けない子どもへ保育者が行う支援内容 (N=81)

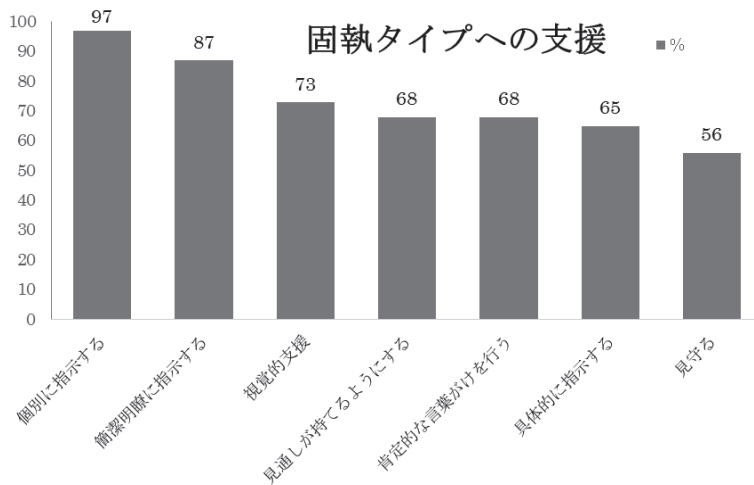


図5 固執タイプ（こだわりが強い）の子どもへの保育者が行う支援内容 (N=81)

次に、質問「⑧集団行動に入れないのはどのような理由だと思われますか。」の問いに対して、その理由を、「初めての活動が苦手」を79%、「外からの刺激が気になる」が71%、「気持ちの切り替えが困難」が53%、「活動内容の理解が難しい」が53%の保育者が推測していた。この他の理由には、「自信がなく、不安を持っている」が48%、「集中力が続かない」が46%、「苦手な活動に入れない」が41%、「自分のルールやこだわりがある」が30%、「人の気を引きたい」が23%、「お試し行動」が7%、「園での生活になれていない」が7%であった。保育者が回答した理由から、気になる子どもが問題行動を起こしてしまう背景には、脳機能の原因による「想像力の欠如」、「刺激への過敏性」があることが推測される。

では、先行研究で気になる子どもの発達を促す方法である運動遊びについての支援の現状はどのようであろうか。質問の「⑨気になる子どもに運動遊びを用いた支援をされていますか」の問いに対して、運動遊びを用いた支援を「行っている」が26%、「行っていない」と答えた人は、13%であった。最も回答が多かったのは、「時々行っている」の40%であった。「今後行いたい」との回答が12%もあったことから、保育者は、運動遊びを用いた支援が、子どもの発達を促す効果はあるとわかっているにもかかわらず、具体的に何をすればよいのか、不明であるのかもしれない。

では、具体的にはどのような運動遊びを行っているのであろうか。質問の「⑩気になる子どもへの支援や保育でよく使われる運動遊びのジャンルを教えてください」の回答を図6に示した。保育所で行われている運動のジャンルは、73%の保育士が「リズムに合わせて踊る遊び」をあげており、次いで、「走る運動遊び」53%、「バランスをとる遊び」44%、「ジャングルジムなどにぶら下がったり、よじ登る遊び」37%、「跳ぶ運動遊び」32%、「庭や草の上などを転がる遊び」26%、「投げるや捕るなどの遊び」22%、「サッカーのように蹴る遊び」12%、「その他」12%、「ボールを転がす遊び」9%であった。

支援や保育で使われる運動のジャンル

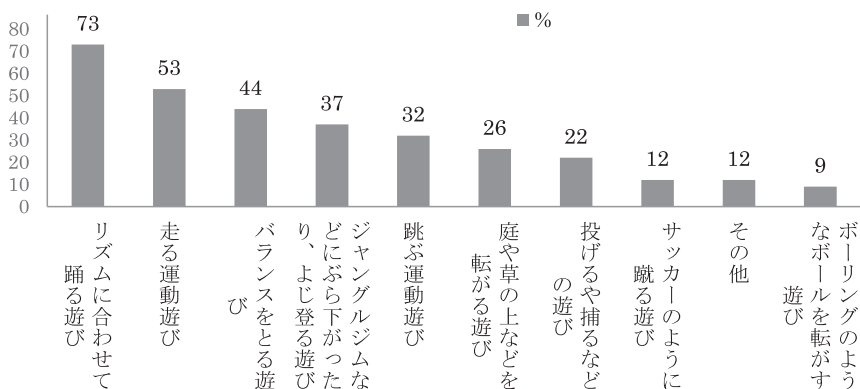


図6 気になる子どもへの支援や保育でよく使われる運動遊びのジャンル (N=81)

表1 運動遊びを用いた支援を行う際の保育者の配慮

保育者の支援分類	支援の具体的な内容
声かけ	・声かけなどで自主的に動けるようにする
	・その子のまず行動したいことを絶対に否定しない
	・～もいいけど危ないね。～もうすこししたら、と助言するようにしている
見守る	・けが、危険のないように側で見守る
	・衝動的の子などで安全に気を付ける
	・加配の先生と連携を取りながら
体の動きの確認	・バランスよく動けるように
	・子どもの体の全体、体の使い方、成長の仕方を見ていく
	・ただ体を動かすだけでなく目的を持って行う
	・脳幹を鍛えるあそびが大切だと思っている
社会的ルールも加える	・その子に身に着けたいルールを少しずつ、楽しい中で行う
	・「順番を待つ」ということも一緒に取り入れる
子どもが楽しめる	・楽しみながら
	・その子が自信を持ってできる事柄
	・発散
	・楽しく体を動かせるようにすること
	・無理なく出来るようにする
	・無理強いしないよう、負担にならないように

次に「⑪運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されている方は、支援する上でどのような事に気を付けていますか。」との問いに対して、保育者が行っている配慮は、表1にまとめた通り、「声かけ」「見守る」「体の動きの確認」「社会的ルールを加える」「子どもが楽しめる」の5つに分類できた。子どもの姿を見て、子どもが楽しめるように見守り、言葉がけを行いながら、子どもの気持ちを尊重する関わりをしている保育者の姿が推測される。運動遊びを行うことだけではなく、社会性のスキルも向上するように、ルールや危険なことをしないことについても並行して支援していることもわかった。

次に、「⑫運動遊びを用いた支援を気になる子どもへ実践されている方に対して、それらの支援によって子ども達はどのような変化や成長がみられましたか。」の結果は、図7に示した。運動遊びに支援によって気になる子ども達が「気になる行動が落ち着くようになった」との回答が21%、「待つことができるようになった」が20%と5人に1人が回答している。体力の向上が11%、活発になったとの回答も9%の保育者が報告していたが、全体的に回答者数は2割以下である。より効果的な運動遊びを用いた支援のあり方を検討する必要があるのかもしれない。

では、運動遊びを用いた支援を行っていない保育士は、どのような支援を気になる子どもに行っているのだろうか。質問の「⑬運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されていない方は、運動遊びの他にどのような支援をされていますか。」の結果を図8に示した。結果は、「個別支援」が多く行われていることがわかった。個別支援でどのようなことを行っているのか、今

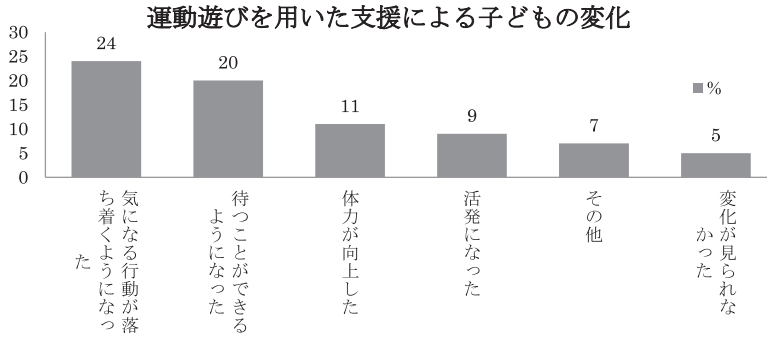


図7 運動遊びを用いた支援による子どもの変化 (N=81)

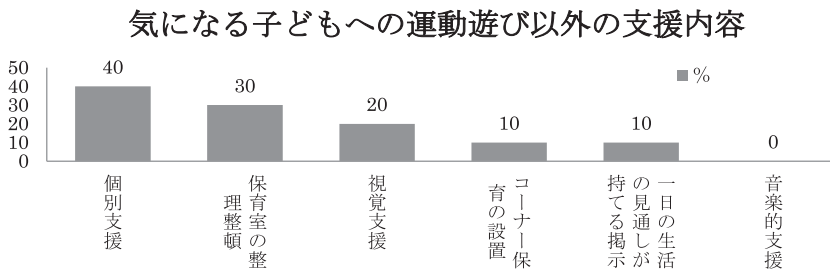


図8 運動遊びを用いた支援を行っていない保育者が行っている支援内容 (N=81)

表2 運動遊びの支援を行っていない保育士が気になる子どもへの支援を行う際の配慮

支援の分類	具体的な気をつけていること
環境構成	・刺激を減らす
	・個別ではなく全体で行う
言葉がけ	・いいところを見つけ本人に伝える
	・褒めることを増やす
関係づくり	・保育者が少しでも信頼してもらえるような関係づくりをする
	・着脱など1対1で行う
	・そばにつき、次の流れをつかめるようにする
視覚支援	・視覚支援を繰り返す
その他	・子どもの成長（体と心）に応じた支援
	・発達の流れ、できるようになったことを理解し、職員間で共有
	・本児の好きな歌や音楽で引きつける

回は明らかになっていない。個別支援の次に「保育室の整理整頓」も行ってた。これは落ち着きがない子どもへの刺激を減らすための実践であることが推測できる。しかし、支援の内容の種類は少なく、行っている保育者の割合も決して高くはない。支援そのものの手立ての種類が限られていることが伺える。

運動遊びの支援を行っていない保育者は、刺激を軽減することを最優先していることが、次の質問である「⑭運動遊びを用いた支援を気になる子どもに実践されていない方は、運動遊び以外の支援を行う際にどのような事に気を付けていますか。」の結果（表2）から伺える。つまり、支援内容を「環境構成」、「言葉がけ」、「関係づくり」、「視覚援助」に分類できたが、環境構成は刺激を減らすことがあげられており、こだわりが強い固執タイプの子どものがじっくり好きな遊びに取り組める環境構成を行っているとの報告は無かった。個別支援が多く、集団の中で気になる子どもが認められるような場面を作るといった積極的な支援が無かった。

以上のように保育者が行う気になる子どもへの支援の手立ての種類が少ない状況で、どのような支援を学びたいと願っているのでしょうか。次の質問の「⑮今後どういった保育者の配慮や援助があれば気になる子どもに効果的な支援になると考えますか。」の回答を表3にまとめた。「遊びの種類」や「保育者が支援を学ぶ」との回答が多くあった。一方、環境構成も刺激を減らすだけではなく、少人数でよいので子ども同士の関わりをあげていた。最も多かったのは遊びを通して、支援を行うことが効果的と考えていることであった。しかし、その具体的内容が分からないので「支援を学ぶ」との回答が多く、個別計画も学びたいと要望している保育者が多かった。

表3 今後、どういった保育者の配慮や援助が効果的な支援となるのか

支援の分類	具体的な支援の内容
環境構成	・刺激の少なくし、少人数での活動を行う
視覚支援	・視覚的なものを用意し、手短に分かりやすく説明する
遊びの種類	・脳幹を刺激するような遊び
	・「表現」を伴う運動遊び
	・リズム遊び
	・体がふれあえる遊び
	・自然に声・笑いが出る遊び
	・体感覚を養える遊び
支援を学ぶ	・子どもの発達を見定める視点・メカニズムを学ぶ
	・個人計画、成育歴の作り方

では、要望であがっていた個人計画はどの程度作成されているのでしょうか。その結果は、図9にまとめた。個別計画の作成は30%、指導計画に気になる子どもの内容を記載しているのは37%であった。明確に作成していないと回答した割合は18%であったが、最も多かったのは無回答であった。

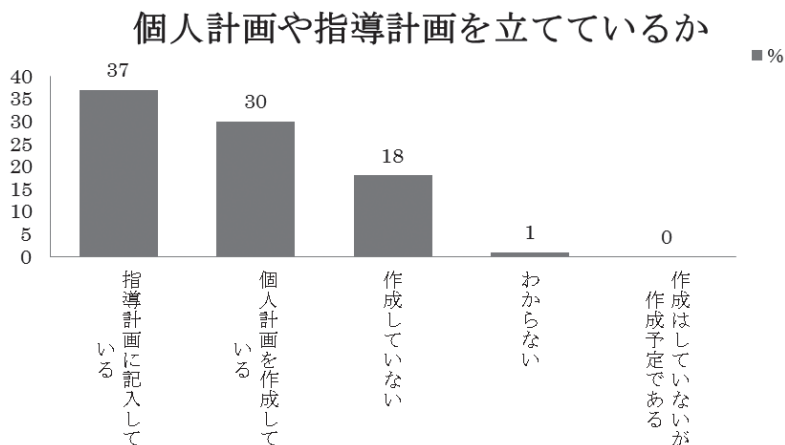


図9 気になる子ども達の支援や配慮の為に個人計画や指導計画を作成状況 (N=81)

4. 考察及び今後の課題

本研究の結果、次の7点が明らかとなった。①気になる子どもはクラスに3名以上在籍することが多く、保育者は対象児が2歳頃で気づくことが多い。しかし、加配保育士が配置される5歳児までは担任保育者のみで、気になる子どもに対応しなければならない状況であった。②気になる子どものタイプは、衝動、集団行動が苦手、固執（こだわりが強い）が最も多い。③運動遊びを用いた支援は、個別に指示が多く、簡潔な言葉で説明、見守り、刺激を少なくし環境を工夫することが多かった。④運動遊びの支援で保育者の配慮は、子どもが楽しめるように見守ったり、言葉かけを行うことが最も多かった。⑤運動遊びを用いた支援によって気になる子ども達は気になる行動が落ち着くようになったり、待つことができるようになったなどがあげられた。⑥運動遊びを用いた支援を行っていない保育者は刺激を軽減するといった環境構成や個別支援が多かったが、より積極的な子ども同士での遊びを使った支援を行いたいと願っていることも明らかとなった。⑦個別支援の為に効果が高い個別指導計画を作成していない現状が明らかとなった。

今後の課題は、運動遊びを用いた支援の具体的な指導の在り方の研修や個別指導計画の作成の普及をどのようにすれば効果的に行えるのかを検討することである。集中するのが困難で落ち着きがない子どもが運動遊びによって、「これ以上、発散状況になってしまい、怪我をしてしまうのではないか」との危惧する心が保育者にあるのかもしれない。今後、気になる子どもに関わる保育者への聞き取り調査と、個別指導計画の作成が難しい要因を分析し、気になる子どもへの支援の質を向上させるための方途を明らかにすることが課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたって廿日市市内保育園・幼稚園に勤務されている先生方及び廿日市市子育て支援課の皆様に深く感謝申し上げます。

注

1. (2016)「気になる子ども」谷田貝公昭編『新版 保育用語辞典』p.20, 一藝社, 東京.
2. 渋谷郁子・少徳仁・藤井奈央子・中村友美・笹井久嗣・樽谷友理・芳本有里子 (2013)「集団活動において困難が目立つ幼児への運動を軸とした支援」『立命館人間科学研究 第26号』pp.89-98.
3. 松原豊 (2017)「運動遊び・身体表現で気になる子ども」ミネルバ書房『発達 第149号』pp.53-57.

[2018. 9. 27 受理]

コントリビューター：藤原 逸樹 教授 (児童教育学科)

